

6. 子供の思いや願いを踏まえた実践

令和3年答申では、「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、子供が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。また、研究協力校等との協議においても担任と子供の思いや願いの違いへの対応として、教師による声かけや、子供との対話の重要性が再確認された。以下、本研究において情報収集した、子供の思いや願いを踏まえた実践を紹介する。

(1) 子供との対話を通して「教科指導上の個に応じた配慮」を検討（小学校）

この小学校では、通常の学級に在籍している教育的ニーズのある児童について本人の思いや願いを生かした支援プランの作成を行った。学級担任が、これまでの授業の様子や単元のレディネステストの結果から、教育的ニーズがあるものの、支援が行き届いていないと思われた児童から、本人の強みや困り、願いを聞き取り、共に支援の方法を検討・共有した。支援プランは児童の支援が必要とされる教科の1単元について5つのステップで行った。

【支援プラン作成の流れ】

ステップ1	困難さのある児童への気付き
ステップ2	学年部会でのミニ支援会議
ステップ3	児童の思いや願いを聞き取る支援プラン会議
ステップ4	ニーズにあった支援のある授業実践
ステップ5	本人との振り返り

①児童1

児童の実態	<ul style="list-style-type: none">書くスピードがゆっくりで、ノートの字が整わない。授業についていけず、集中がきれてしまうことが多い。自分の困りを周りに伝える力が弱い。
思いや願いを聞き取る支援プラン会議	<ul style="list-style-type: none">昼休みに15分間、教室の近くにある別室で行った。担任から、最近の児童1の頑張りを価値づけ、「頑張る気持ちを応援するために、勉強の仕方を先生と一緒に相談しよう」と声をかけた。児童からは、「すぐに忘れて書けない」「書く時間がほしい」「時間があれば書ける」という発言があり、担任は「授業中に書く時間を確保する」児童は「時間が足りない時は伝える」ことを確認した。
授業後の様子と成果	<ul style="list-style-type: none">担任が書く時間を確保したことと担任が板書の言葉を簡潔に書く配慮をしたことで、児童1が授業中に、書ききることができるようになった。授業についていけず、集中が切れることも減った。

	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りでは、児童1は、「書けるようになった」「話を聞けるようになった」と実感している。 ・実践後も授業中、必要に応じて、児童1から担任に時間が欲しいことを伝えられるようになった。
--	--

②児童2

児童の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・学習意欲はあるが、算数での既習事項の定着と計算に困難さがあり、既習事項が思い出せず、学年の算数の内容の理解が難しい。 ・少人数での学習では、友達の意見を聞くばかりで、自分の意見を言わないことが多い。
思いや願いを聞き取る支援プラン会議	<ul style="list-style-type: none"> ・昼休みに15分間、教室の近くにある別室で行った。 ・担任から、最近の児童2に対して「どのように学ぶのがあなたの助けになるのか一緒に相談しよう」と声をかけた。 ・児童は、担任からの支援の提案に意欲的で「ヒントカード」の支援を共有した。
授業後の様子と成果	<ul style="list-style-type: none"> ・児童2は、問題が提示されてからヒントカードをもとに、まずは自分で考えるようになった。 ・ノートに自分の考えを書いてから、友達と確認するようになった。 ・過去のヒントカードを必要な時に使いながら学習を進めた。

③児童3

児童の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・他教科に比べ、算数での既習事項の定着と計算に困難さがあり、既習事項が思い出せず、学年の算数の内容の理解が難しい。 ・対人関係に苦手さがあり、わからないことを言えずに、黙って座っている。担任からの声掛けにも反応が薄い。 ・休み時間もタブレット端末を使用して一人でいることが多い。
思いや願いを聞き取る支援プラン会議	<ul style="list-style-type: none"> ・昼休みに15分間、教室の近くにある別室で行った。 ・担任から、「どのように学ぶのがあなたの助けになるのか一緒に相談しよう」と声をかけた。 ・担任からの支援の提案を受けて、児童3からは「ヒントカードをレベル別にしてほしい」と希望があった。
授業後の様子と成果	<ul style="list-style-type: none"> ・授業が進むにつれて、支援として提供されたヒントカードの使用頻度を自分で調整するようになった。 ・一人で問題解決ができるようになり、児童自身が、分かる問題は、発表できるようになりたいと思うようになった。

(2) 子供が担任の指導や支援に関わった実践

①本人参加型ケース会（小学校）

この小学校では、自分自身を理解し、集団の中でよい経験を積めるように、短期的な目標と支援の手立てを本人と一緒に考えるためのケース会議を定期的で開催した。

児童の実態	<ul style="list-style-type: none"> 感情のコントロールが難しい。 周囲とのトラブルが多い。
会議のねらい	<ul style="list-style-type: none"> 児童の学びの意識を高める。 (個別の指導計画の作成につなげる)
会議の内容	<ul style="list-style-type: none"> 児童のよいところや、困っていること、なりたい自分、そのために必要なことなどを確認する。
準備	<ul style="list-style-type: none"> 保護者の了解 参加者の確定（児童が参加者を決める）
方法	<ul style="list-style-type: none"> 放課後の時間 学期に1回程度（1回15分程度）
児童の変容と成果	<ul style="list-style-type: none"> 回を重ねるにつれ、めあてに焦点を当てた話ができる。 自分の頑張りを素直に認められるようになった。 朝、教室にランドセルを置きに行くこともできるようになった。 学年が上がると、教室での学習に参加、係活動にも取り組めるようになった。

また、本人が自分の意見を話すことが難しい場合に、次のようなやりとりを意識することで、子供の発言を促した。

やりとり	備考
「これはどう？」	1つのことに対する意思の表出
「どっちがいい？」	2つの選択
「どれがいい？」	3つ以上の選択
「どうしたい」「どう思う？」	選択肢なし
「これはどう？」	提案への同意、拒否
「どうしてそう思う？」	自分の気持ちの表出

②自分に合った学び方を考える「学びのカルテ」の活用（中学校）

この中学校では、生徒の多様な学び方を支える取組として、生徒が保護者や担任、通級担任と教科指導に関する「学びのカルテ」を作成し、活用する取組を行った。

カルテのねらい	・学習意欲の喚起、卒業後の生活に向けた準備
カルテの内容	・各教科で配慮してもらいたい内容をまとめ、担任に依頼する。 (例)「急に指名しないでほしい」「忘れ物が多いので声かけをお願いしたい」など
通級担当とのやりとり	・自分の学びの特性を知る（生徒の認知特性について） ・専門家からのアドバイス（得意なこと、苦手なこと） ・先生方をお願いしたいこと（勉強のこと、生活のこと、部活のこと） ・希望する座席について ・子どもの権利条約について
工夫や成果	・本人、保護者、教員が「学びのカルテ」の作成にかかわる。 ・本人の希望を優先する。 ・生徒一人一人に学びの特性を説明する。 ・生徒が自分の思いや考えを、担任に伝えることができるようになった。 ・中学校を卒業後、合理的配慮の提供を自分の言葉で要請できるようになった。

③授業やテスト、教材に対して生徒の感想等を聴取（中学校）

この中学校では、定期的に教科指導の方法や教材等について、学習支援アプリのアンケート機能を活用して、在籍する全ての生徒の意見を集約し、授業改善に役立てている。授業の進め方や、テストの解答時間や難易度、教材の使い勝手について、生徒からは、「～が役に立った」「このやり方だと苦手なことが楽になった」というような感想や、「○○（他教科）のような資料や教材が欲しい」「～もう少し早いタイミングで教材を提供してもらいたい」というような意見が寄せられた。また、「教科指導上の配慮」についても意見を募集しており、「挙手をして質問することに不安があるため、違う方法でも受け付けてもらいたい」という生徒の意見があった。